

目次

アンケートのご回答はこちらから



読者の皆様のご意見・ご要望を
今後の企画・編集の参考に
させていただきます。

新指定の文化財—民俗文化財—	4
〔重要有形民俗文化財の指定〕	4
〔重要無形民俗文化財の指定〕	7
〔重要無形民俗文化財の指定内容及び名称変更〕	11
文化庁文化財第一課	
新登録の文化財—民俗文化財—	14
〔登録有形民俗文化財の登録〕	14
〔登録無形民俗文化財の登録〕	16
文化庁文化財第一課	
新選択の文化財	
—記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財—	18
文化庁文化財第一課	
◆—————◆	
令和3年度伝統工芸超分野交流事業	22
文化庁文化財第一課	
文化庁国立近現代建築資料館10周年	24
文化庁国立近現代建築資料館	
文化財だより	31
連載 伝統的建造物群保存地区を味わう	32
お酒を味わう旅 第4回	
酒は百薬の長～百度目の春を迎えられますように～	
石井 里英	
連載 日本遺産をめぐる 第17回	34
中世に出逢えるまち	
～千年にわたり護られてきた中世文化遺産の宝庫～	
山川 綾子	
年間総索引	36
表紙解説 銀鏡神楽（重要無形民俗文化財「米良の神楽」）	38
口絵解説 重要有形民俗文化財 陸前高田の漁撈用具	2

一 文化庁国立近現代建築資料館の役割と沿革
文化庁国立近現代建築資料館（以下「近現代建築資料館」という。）は、平成二十四年（二〇一二年）十一月に設置が決定し、平成二十五年五月に開館した施設であり、ちょうど設立一〇周年を迎える。設立の背景には、我が国の近現代建築が、世界の文化芸術の重要な一翼を担う存在となっているにもかかわらず、その学術的、歴史的、芸術的価値を次世代に継承する体制が十分ではなかったという事情があった。象徴的な出来事として、日本の近現代建築を代表する丹下健三の図面資料がハーバード大学に収蔵される形で国外流出した。また、複数の著名な日本人建築家の図面が海外の美術館等に収集されるという状況は今日も続いている。我が国の近現代建築に関する資料（図面や模型、スケッチなど）について、劣化、散逸、海外への流出等を防ぐことは喫緊の課題であり、近現代建築資料館は、その課題に応えるため、緊急な保護が必要な資料の収集・保管を行うことを目的として設立された。

緊急な保護が必要な資料を把握するために、全国的な所在状況の調査、関連資料をもつ

ついて適切に管理を行う施設として、平成二十九年十一月一日付けで「歴史資料等保有施設（公文書管理法第二条第四項第三号及び公文書管理法施行令第三条第一項の規定に基づく施設）」に指定されている。

二 近現代建築資料館の事業の枠組み

近現代建築資料館では、先述した役割を担うべく、設立以来、以下の四つの主要な事業を行っている。

- (1) 近現代建築関連資料の情報収集
全国的な所在情報調査を行い、建築資料の保管場所を把握するとともに、劣化、散逸、海外への流出のおそれがないか、情報を収集する。また、関連資料をもつ機関（大学等）と連携し、所在情報のネットワークを形成することで、国全体として建築資料収集・保管を行っていくための拠点としての役割を果たす。
- (2) 資料の収集・保管・公開
緊急に保護が必要な資料の収集・保管を行い、目録を作成して体系化し、アーカイブズとして収蔵する。なお、文化庁において収集する建築関係資料は、「我が国の近現代建築に関し、国内外で高い評価を得ている又は顕著に時代を画した建築・建築家に係るもの、又は、我が国の近現代の建築史や建築文化の理解のために欠くことができません、かつ、歴史上、芸術上、学術上重要なもののうち、散逸等のおそれが高く、国において緊急に保全する必要があるもの」とする。併せて、必要とされる場合、資料の現物貸出、画像提供、資料閲覧などの対応を行う。

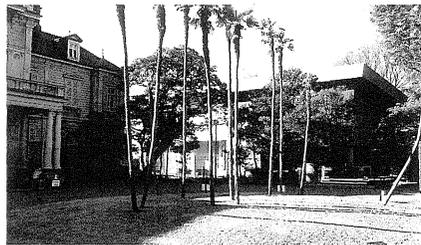


写真1 旧岩崎邸庭園から、近現代建築資料館（右）を見る。左は、ジョサイア・コンドル設計の旧岩崎邸（1896年竣工）（写真撮影・文化庁国立近現代建築資料館）

機関（大学等）との連携が必要であり、設置決定前後から、そうした情報収集活動にも着手した。また、展示や普及活動を通じ、近現代建築とその関係資料に対する国民の理解増進を図っていくことも重要な課題であり、それらの活動にも積極的に関与している。

立地は、東京都文京区にある湯島地方合同庁舎敷地内の北端に位置する。正門経由でのアクセスのみならず、都立庭園の一つ、旧岩崎邸庭園

(3) 展示・教育普及

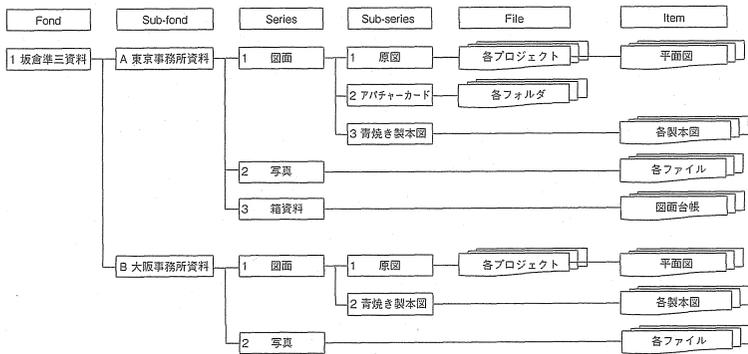
建築資料に関する展示や講演会、ギャラリートークなどの教育普及活動を通じて、近現代建築とその関連資料に対する国民の理解増進を図るとともに、国内外への情報発信を行う。特に、収蔵した資料に関しては、適切な修復や整理を行った上で、速やかな展示公開を行う。

(4) 調査研究等

国内外の研究機関と連携し、建築資料の保存・修復やデータベース構築に関する調査・研究を行い、我が国に適した建築資料アーカイブズの構築を目指す。また、近現代建築とその関連資料に関する調査・研究の発展に寄与する。

三 一〇年間の収蔵資料の概要

以上のような目的や事業の枠組みに基づき、近現代建築資料館は、建築資料収集を進めてきた。近現代建築資料館のようなアーカイブズ組織においては、特定の建築家や建築事務所が活動する中で作成され、蓄積された記録の総体（資料群）を「フォンド」(Fond)と呼ぶ。近現代建築資料館では、フォンドの下位に位置付けられる、建築のプロジェクトごとに作成された図面筒や図面フォルダのようなまとまりを示す「ファイル」(File)から、さらに個々の図面や設計図書等の簿冊などの「アイテム」(Item)に至るまで、順次階層的な調査を行い、目録を整備している。近現代建築資料館における坂倉準三資料のアーカイブズ資料の階層構造の一部抜粋を、参考に示すと下図のとおりである。



(作成・文化庁国立近現代建築資料館)

図 アーカイブズ資料の階層構造（坂倉準三資料の事例）（一部抜粋）

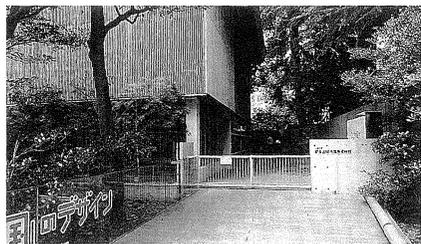


写真2 旧岩崎邸庭園に面する近現代建築資料館の出入口ゲート（写真撮影・文化庁国立近現代建築資料館）

図からアクセスすることも可能であり、その場合は、ジョサイア・コンドルが設計し、明治二十九年（一九〇六）に竣工した旧岩崎邸（岩崎財閥三代の岩崎久弥の住宅）の正面を見ながら、近現代建築資料館のゲートに至るといった、文化的な雰囲気にも満ちた動線となっている（写真1・2）。

なお、近現代建築資料館は、保有する歴史もしくは文化的な資料または学術研究用の資料に

計事務所ごとにとまとめられており、令和四年

(二〇二二)十一月時点で、近現代建築資料館のホームページで公開されている資料の概略を述べると次のとおりとなる。個別のフォンドに含まれる資料数は、数点の場合もあれば、数万点に及ぶものもあり多様であるが、設立以来、かなりの速度で資料を収集してきたことが分かる。換言すれば、社会全体として、そうした資料保管の受け皿が必要とされていたという事実が浮かび上がってくる。

・坂倉準三建築設計資料 一九三九〜六九年
坂倉準三建築研究所において作成された建築設計図書、写真、スケッチ等に加え、坂倉個人に関する記録を含めた建築家坂倉準三及び坂倉準三建築研究所の事業記録に関する総体である。資料群に含まれる属性は、①個人文書、②専門文書、③会社記録、④プロジェクト、⑤美術品・工芸品に大別される。

・丹下都市建築設計所蔵マイクロフィルム(データ) 一九五三〜八九年

建築家の丹下健三が率いた東京大学「丹下研究室」及び株式会社都市・建築研究所(のちに丹下健三・都市・建築設計研究所、丹下都市建築設計に改題)が作成した設計図面等を撮影したマイクロフィルムである。一九五〇年代から六〇年代の丹下健三を代表する芸術的・技術的評価の高い作品に関する設計図面が、案件ごとに異なるルールで撮影されており、複製による資料群として体系的な価値を構成している。

・池辺陽 渋谷区復興計画案資料 一九四六〜四九年

吉田の学生時代(一九一九年以前)から最晩年の作品である「美松書房」(一九五三年)までの、個人としてだけでなく、通信省としての作品も含まれている。戦前の日本の近代建築の推進に寄与した吉田鉄郎の公私両方における活動と彼の設計思想を示す貴重な資料である。

・平田重雄建築設計資料 一九四一年頃〜八六年頃
平田重雄が米國コーネル大学留学時(一九二〇年代末)に描いた絵画、スケッチ等のほか、松田平田設計事務所にて松田軍平と共同代表を務める傍ら、個人で手掛けた建築作品を含む住宅、アパート等のプロジェクトに関係する図面や写真、原稿などで構成される。

・岸田日出刀建築資料

岸田建築研究所作成の図面と、岸田日出刀個人資料に大別される。図面は八〇枚程度。個人資料は調査旅行等の日記帳三冊、調査時に撮影した写真を収めたマイクロフィルム、自著、他著などに分けられる。

・前川國男建築設計資料 一九四六〜七七年
前川國男建築事務所及び前川國男建築設計事務所において作成された建築設計図書、写真等から構成される。資料は①会社記録(工事請負契約書コピー)、②プロジェクト記録(建築設計の設計図書、スケッチ、仕様書、工事写真、竣工写真等)に大別される。

そのほか、これらの資料群に加え、高橋誠一・第一工房資料、原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料、ブルーノ・タウト関連資料、ヴァスモト社所有吉田鉄郎著作関連資料、安藤

一九四六〜四九年頃、池辺陽が作成した渋谷地区の震災復興計画案である。

・村田豊建築設計資料 一九六〇〜八八年
内容は大きく三種類に分けられる。まず、村田豊個人の原稿などからなる専門文書、次に会計書類などを含む会社記録、最後は図面、写真、模型、映像などからなるプロジェクト記録資料である。

・吉阪隆正+U研究室建築設計資料 一九五二年頃〜八〇年頃

内容は大きく二つに分けられる。一つは、主にル・コルビュジエの事務所で描いたと思われる図面資料を含む、吉阪研究室(後のU研究室)開設以前の一九五四年までの資料。もう一つは、開設以後の一九五四年から吉阪隆正が亡くなる一九八〇年までの資料である。いずれも図面、スケッチ、文書等から構成されている。

・ル・コルビュジエ工作 綴帳「闘牛14号」(旧東急文化会館「渋谷パステオン」綴帳) 一九五六年

建築家坂倉準三が、師であるル・コルビュジエに原画の制作を依頼し、「闘牛14号」と題する原画作品をもとに川島織物合資会社(現・株式会社川島織物セルコン)が西陣織の技術を用いて製作した。

・大高正人建築設計資料 一九三七年頃〜二〇一〇年

内容は大高建築設計事務所(一九六二〜二〇一〇)で行った建築・都市計画業務に関する資料で、設計図書・報告書・写真等からなる。

・渡辺仁資料 一九〇四〜六七年頃
渡辺が熊本の第五高等学校第二部に入学する

忠雄建築設計資料、篠井家旧蔵吉田鉄郎城端邸便局資料などを収蔵している。

四 直近二年間の資料提供、教育普及、調査研究の実績

(1) 資料提供

① 現物の貸出、② 画像の貸出、③ 資料閲覧及び複写の提供に大別して対応を行っている。次に詳細を記載するが、この二年間だけでも、現物貸出が約四〇〇点、資料閲覧数の点数は約一百万点に及ぶ。所蔵資料に関して、貸出や複写の社会的ニーズがいかに多いかがよく分かる。

【令和二年度】

① 現物の貸出は、鳥根県立美術館の展覧会「菊竹清訓 山陰と建築」のために、菊竹清訓資料より二五点を貸し出した。
② 画像データの貸出は、全一五か所に対して、計約二五〇点であった。用途は、展示、書籍、論文への掲載、テレビなどでの放映、図面が収蔵されている建物の復元用図面としての使用などが多い。

③ 資料閲覧は計二二件一五六八点であり、複写の提供は計九件五九九点であった。

【令和三年度】

① 現物の貸出は、坂倉準三資料より、鎌倉文華館鶴岡ミュージアムの展覧会「ひらかれたミュージアム」のために、鎌倉近代美術館関連資料一四点、高島屋史料館 TOKYO の展覧会「建築家・坂倉準三と高島屋の戦後復興」「輝く都市」をめざして」のために、新宿西口広場・

前後(一九〇四年頃)から欧米視察に行く一九二六年頃までのスケッチ帳、東京帝国大学工科大学建築学科在学中の設計課題、大正末の洋行時に書かれた書簡、昭和初期までの建築作品に関する写真アルバム、戦後、一九五三年に渡辺高木建築事務所を設立し、一九六七年に黄綬褒章が授与される頃までの図面、文書資料等から構成されている。

・木村俊彦構造設計資料群 一九五四〜九九年
内容は主に木村俊彦構造設計事務所(一九六四年設立)で作成・收受された構造設計図書、文書、写真、スケッチ等を含む構造家木村俊彦の業務記録に関する総体である。木村が大学在学中、前川國男建築設計事務所、横川構造設計事務所在籍中に作成されたものも一部含まれる。資料は、木村が関わった建築プロジェクトの図面、構造計算書を含むプロジェクト資料、写真、プログラム資料、その他資料に大別される。

・菊竹清訓建築設計資料 一九五三〜六九年
菊竹建築研究所を開設した一九五三年以降、事務所で作成された図面資料である。

・こどもの国建築関連資料 一九五九〜七四年
こどもの国の施設建設にあたって作成された事業記録に関する書類、工事契約書、寄付金関係書類などで、一九五九〜七四年の間にこどもの国建設協力会において作成されたものである。また、施設の設計を担当した建築事務所が作成した青焼き図面も含まれる。

・吉田鉄郎建築設計資料 一九一五年頃〜五七年頃

小田急他関連資料一九六六、川崎市岡本太郎美術館の展覧会「戦後デザイン運動の原点 デザインコミッティーの人々とその軌跡」のために、岡本太郎邸立面図ほか五一点をそれぞれ貸し出した。また、東京都現代美術館の展覧会「吉阪隆正展 ひげから地球へ、パノラマ」のために、吉阪隆正自邸立面図ほか七八点を貸し出した。

② 画像データの貸出は、全一四か所に対して、計三〇点であった。

③ 閲覧は計一七件七九三六点であり、複写の提供は二件一九九点であった。

(2) 教育普及

【令和二年度】

近現代建築資料館では、近現代の建築資料を所蔵する組織の学芸担当者等を対象に、近現代建築資料における収集、整理、保存及び利用等に関する必要な専門知識と技能の習得を目的として「近現代建築アーカイブズ講習会」を行っており、令和二年度は第二回目となった。日程は、令和二年十一月十二日(木)と十三日(金)の二日間で、湯島地方合同庁舎の会議室での対面とオンラインを併用した。参加者は、対面が二二名、オンラインが四名であった。

なお、令和三年度は、新型コロナウイルスの影響もあり、講習会にかえて近現代建築アーカイブズ研修オンライン教材として、「アーカイブズの基礎」(講師:保坂裕興学習院大学大学院教授)及び「近現代建築資料保存の意義と実践」(講師:田中正之園立西洋美術館長)の二本を制作し、令和四年度にインターネットに公開した。

表 近現代建築資料館がこれまでに開催した展覧会一覧

年度	展覧会名称(会期)
平成25年度	開館記念特別展示「建築資料にみる東京オリンピックー1964年国立代々木競技場から2020年新国立競技場へ」(平成25年5月8日~6月14日)
	「人間のための建築ー建築資料にみる坂倉準三」(平成25年11月27日~平成26年2月23日)
平成26年度	「建築アーカイブをめぐってー前年度活動報告展」(平成26年5月8日~8月24日)
	「建築のこころーアーカイブにみる菊竹清訓展」(平成26年10月29日~平成27年2月1日)
平成27年度	「ル・コルビュジェ×日本ー国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に」(平成27年7月21日~11月8日)
	「みなでつくる方法ー吉阪隆正+U研究室の建築」(平成27年12月3日~平成28年3月13日)
平成28年度	「資料にみる近代建築の歩み」(平成28年5月14日~7月31日)
	「建築と社会を結ぶー大高正人の方法」(平成28年10月26日~平成29年2月5日)
平成29年度	「平成29年度国立近現代建築資料館収蔵品展」(平成29年6月10日~9月10日)
	「紙の上の建築ー日本の建築ドローイング1970s-1990s」(平成29年10月31日~平成30年2月4日)
平成30年度	「平成30年度収蔵品展 建築からまちへ1945-1970 戦後の都市へのまなざし」(平成30年6月9日~9月9日)
	明治150年 開館5周年記念企画「明治期における官立高等教育施設の群像ー旧制の専門学校、大学、高等学校などの実像を建築資料からさぐる」(平成30年10月23日~平成31年2月11日)
令和元年度	「安藤忠雄初期建築原図展一個の自立と対話」(令和元年6月8日~9月23日)
	「吉田鉄郎の近代 モダニズムと伝統の架け橋」(令和元年11月1日~令和2年2月11日)
令和2年度	「ミュージアム1940年代-1980年代:始原からの軌跡」(令和2年10月1日~11月15日)
	「工匠と近代化 大工技術の継承と展開」(令和2年12月10日~令和3年2月19日)
令和3年度	「丹下健三 1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで」(令和3年7月21日~10月10日)
	「令和3年度収蔵品展 「住まい」の構想 収蔵資料が物語る名作住宅(1940-1975)」(令和3年12月14日~令和4年3月13日)
令和4年度	「令和4年度収蔵品展 「こどもの国」のデザインー自然・未来・メタボリズム建築」(令和4年6月21日~8月28日)

『国立近現代建築資料館紀要』第一号刊行
 当館の収蔵資料に関する情報と、館職員や協力者の調査研究成果の公開について、令和二年度から公開方法を検討してきたが、研究論文や資料紹介等を掲載する『国立近現代建築資料館紀要』として令和三年九月にオンラインと印刷(A4判、六四ページ)の両方で刊行し(年一回刊行予定、逐次刊行物としてISSNを取得したISSN 2436-6757(オンライン)、ISSN 2436-6765(印刷))。令和四年度には、『国立近現代建築資料館紀要』第二号の刊行を行った。二〇二二年十二月から、科学技術振興機構が運営する「STAGE」上で公開している。(<https://www.jstage.iist.go.jp/browse/namuhlelin/char/ia>)

(3) 調査研究
 【令和二年度・令和三年度】
 ・我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査
 一九九〇年代以降は建築資料の電子化が進み、このような建築資料をいかにアーカイブズとして構築するか、そして適切に保管、活用していくか、その方策を見いだすことが今後の課題として認識されている。本調査はその資料的特性等から、他の建築資料よりも先行して電子化が進んだ構造資料を対象として、これまでの三か年の構造家の概要資料調査の成果を踏まえ、複数の存命の建築家の資料について、アーカイブズ構築のための課題を整理し、構造資料の電子化継承に関わる様々な可能性について検討し、「我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査」報告

五 これまでの資料展示

設立以来、二階の展示室を活用して、近現代建築に関する重要な建築資料に関する展覧会を年に二回程度開催し(写真3)、併せて、展示内容に関連する講演会、ギャラリートークなどを開催することで、建築資料に対する社会的関心や理解を高める方策を行ってきた。新型コロナウイルスの感染が著しい時期においては、対面型の講演会やギャラリートークの開催は控えたが、オンラインやインターネットを活用するなど、新たな取組を行った。過去の展覧会は次頁

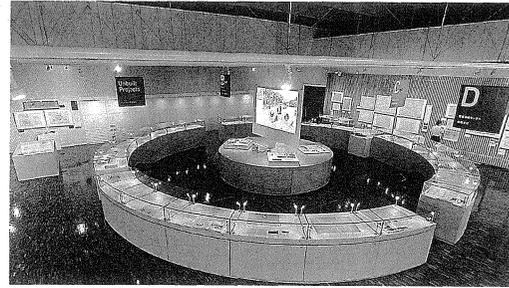


写真3 近現代建築資料館の展示室。「令和4年度収蔵品展「こどもの国」のデザインー自然・未来・メタボリズム建築」(2022年6月21日~8月28日)開催時(写真撮影:文化庁国立近現代建築資料館)

六 直近の展覧会及び来年度の10周年特別展

【令和四年十二月十三日(火)~令和五年三月五日(日)】
 ◆原広司 建築に何が可能かー有孔体と浮遊の思想の五五年一(写真4)
 建築家・原広司に関する展覧会である。原は、東京大学で二八年にわたって教鞭をとりながら、個人住宅から美術館や教育施設、さらに駅舎、高層建築、ドーム建築などの大規模建築に至るまで幅広く建築作品を創り出してきた。その中には、J・R京都駅、大阪の新梅田シティ・スカイビル、札幌ドームなど世界的に有名なランドマーク作品も含まれる。

また原による数学、哲学、芸術をはじめとした多様な視点からの建築に関する思索は、日本の現代建築の発展を大きく牽引した。その代表である一九六七年の著書「建築に何が可能か」における「有孔体」と「浮遊」の思想に始まる原の一連の建築思想は、現代建築に計り知れない



写真4 現在開催中の「原広司 建築に何が可能かー有孔体と浮遊の思想の55年一」のポスター

い影響を与えた。

本展覧会では、近年、原広司+アトリエ・フアイ建築研究所から近現代建築資料館に寄贈が進められている建築資料群の中から、「有孔体」と「浮遊」というテーマの展開を示す「図面とスケッチを、年代順に展示する。原広司作品の根源であるこの二つの発想が、住宅から大規模建築、都市に至るまで、いかに具現化し、発展したか」という点に着目することで、原広司の思想と実体的建築の関係を解説し、独創的な建築デザインの背後にある思考が理解できるように配慮した。

【10周年記念特別展(現在検討中)】第一部
 令和五年七月~十月、第二部:令和五年十二月~令和六年二月

◆日本の近現代建築NAMA収蔵資料大公開
 開館10周年に際して、近現代建築資料館の存在意義、社会的役割の認知度を高める展覧会を企画する。

これまでの活動の軌跡や館の活動を紹介しつつ、一〇年にわたり収集してきた貴重な図面資料などの公開を行う。展示対象は、主に著名な意匠設計建築家とし、これまで展示していない図面資料を中心に、資料を一室に展示する。

二部に分けての開催とし、展示室において建築家に関する収蔵資料の展示を行うが、ロビーにおいては、資料館概要と目的、一〇年間の軌跡、これまで実施した展覧会のポスターやチラシ等のパネル展示、貴重なオーラルヒストリーの上映なども検討している。

七 課題と展望

以下、「二 近現代建築資料館の事業の枠組み」で述べた四つの点について、現時点での課題を整理して述べたい。

(1) 情報収集と情報発信

全国的な所在情報調査を行うことで、関連資料をもつ機関（大学等）を含め、建築資料の保管場所の把握は大きく進んだ。今後は、複数の機関でのネットワークを構築し、近現代建築資料館が、そのハブとしての役割を担えるよう整備を進める必要がある。

そのためには、各施設・機関が所蔵資料情報を分かりやすく発信する必要がある。近現代建築資料館では、令和三年六月に収蔵資料検索システム (<https://dhanabunko.jp>) を公開した。収蔵する資料群の概要公開（一六資料群）、ファイル（図面簡、図面フォルダ等）レベルまでの目録公開（五資料群）、アイテム（個別の図面や資料）レベルまでの目録公開（六資料群）、サムネイル画像の公開（一部三資料群）を行っている。この公開システムにおいて、できるだけ多くの資料がウェブ上で閲覧できるように整備を進めていきたい。

(2) 資料の収集・保管・公開

近現代建築資料館が収集・保管する資料は、調査や展覧会等のために一部寄託はあるものの寄贈を原則としている。開館当初は、近現代建築資料館から所有者に対して、寄贈を促すことも多かったが、近年では、むしろ所有者から近現代建築資料館へ、寄贈の打診や依頼をいただ

くが増えてきた。近現代建築資料館が、近現代建築資料のアーカイブズとして社会的に認識されつつある結果と考えられる。と同時に、建築家の世代交代や、手書き図面からCAD図面への移行の中で、手書き図面の保存の必要性が増えてきていることも事実であり、近現代建築資料館の役割はますます大きくなるものと考えられる。

それに伴い、収集図面の修復、目録の作成による収集品の体系化、収蔵スペースの拡充の必要性、作業を行う人員の確保などが、喫緊の課題となつている。また、資料の公開や安全な保存に際しては、資料のデジタル化が大前提になる。図面を中心とした高精細デジタル化は、開館当初から実施しているが、関係する事業の内容によつて、デジタル画像の仕様や品質にばらつきが生じてきたため、令和二年度から、デジタル化の標準仕様を策定して、仕様に基づいた高精細デジタル化に取り組んでいる。他方で、それに対応する人員や予算の制約もあり、収蔵資料の急速な増加には追いついていないのが現状である。

(3) 展示・教育普及

建築資料に関する展示や講演会、ギャラリートークなどの教育普及活動にも力を入れてきた。例えば、展覧会に際して図録を作成しているが、これまでに作成した図録だけでも、日本の近現代建築の展開をたどることのできる貴重な資料といえる。

来館者アンケートでは、展覧会に毎回来ている方々も多く、また、同じ展覧会に複数回来ら

れる熱心な方もいる。建築資料に対する国民の理解増進という点では、一定の役割を果たしつつある。近現代建築資料館の設立以後、他の美術館等での建築をテーマとした展覧会が増えていることも事実である。今後は、近現代建築資料館での展覧会に加え、資料貸出による展示や他の展示施設との協働展示なども積極的に行うことで、資料公開をより効果的に進めていきたい。

(4) 調査研究等

国内外の研究機関と連携し、建築資料の保存・修復やデータベース構築に関する調査・研究を行うことで、我が国に適した建築資料アーカイブズの構築を目指すには、人材育成が必要不可欠である。しかしながら、現時点で建築資料のアーカイブズをカリキュラムとしている大学は、限定的である。近現代建築資料館での勤務を経て、大学で教育研究に従事している人材も、わずかながらでてきているので、大学への協力なども行いつつ、人材育成の成果をさらに高めていくことが必要である。

以上、課題は多く、その道のりは長いですが、世界をリードする我が国の建築分野の進展を支える上でも、近現代建築資料館の果たすべき役割は大きいものと考えている。

（吉野 孝行・文化庁国立近現代建築資料館副館長）

（小林 克弘・文化庁国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官）

（田良高 哲・文化庁国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官）

（田良高 哲・文化庁国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官）

◎次号は「文化財の保存科学(三)―文化財修理と合成樹脂―」を特集します。

■『月刊文化財』購読について

『月刊文化財』は、東京国立博物館売店でもお求めいただけます。

定期購読の場合は、お近くの書店でお申し込みいただくか、左記へご連絡ください。バックナンバーのお問い合わせも左記にて承ります。

*電話 / 0120-2003-694

*FAX / 0120-3021640

*URL /

<https://www.dainihoki.co.jp/>

※購読のお申し込みいただいた(住所やお名前などは、企画の参考など本誌にかかわる目的にのみ利用し、他の目的では使用いたしません。

月刊文化財 三月号(七一四号)

令和五年三月一日発行

定価七八五円 **本体七一四円**

監修 文化庁

発行所 第一法規株式会社

〒100-0001 東京都港区益壽町1-1-17
TEL 03-2011-0316 03-2011-0314

本誌掲載記事の無断転載を禁じます。